

幕藩体制内に於ける藩家老の

行政意識について

——福岡藩家老吉田治年の場合(二)——

三 木 俊 秋

この小稿の第一回目は既に昭和四十五年十一月発行の本誌第十七巻第二号に掲載したが、今回はその第二回目のものである。前回に述べたように福岡藩の家老を勤めた家の一つである吉田家の第五代の当主吉田治年が職分（福岡藩内家老格の呼称）となつてより、当役（御勝手方御財用裁判役）に任命され、享保六年三月に当役辞退が許されて隠居するまで、凡そ八年間に、幕藩体制内の制約のもとに、如何なる意識をもつて福岡藩内の行政に対処していったかを見てゆこうとするものである。

前回はその「序章」として家老吉田治年が当役に就任するまでの福岡藩の状態について簡単にのべ、治年が幼年時代より中老に就任しその間に幾多の藩内の藩主・藩主の後嗣・家老職の栄枯盛衰を身近かに目撃したことを述べたのである。治年は後年当役勤務の期間中は毎日が薄水を踏む思いであつたと述懐するのであるが何故にその様な思いをせねばならなかつたか、彼が当役として事に対処する際の、用意周到さ、及び決断力と言つたものを必要とする事情が奈辺にあつたかを理解するために、今回は、当役（御勝手方御財用裁判役）の治年の前任者隅田（黒田）重時の執政が如何に不評であつたかを中心に見てゆきたい。即ち第一章として「前任者の失政」と題した所以である。

第一章 前任者の失政

吉田治年は隅田重時（黒田主膳）のあとを受けて正徳三年（一七一三）三月十三日当役即ち「御当用本締役」となるのであるが、その前任者黒田主膳（隅田重時）について少しく言及しておきたい。

この隅田重時が当役即ち藩政の責任者として政権の座についたのは宝永四年（一七〇七）のことであると考えられる。これは吉田治年がはじめて職分（家老格）となつて、藩主綱政の継嗣吉之の補佐を勤めることとなつた宝永五年（一七〇八）正月より以前のことである。即ち宝永四年十月には重時より前の当役鎌田八左衛門昌生及びその息子重之助が籠居を命ぜられ、吉田治年へ御預けの処分を受けている。⁽¹⁾（吉田家傳録十五、宝永四月十月の条）

この鎌田八左衛門昌生は当役に就任した後、藩の財政窮乏を補うため、諸国でこの頃発行されはじめた鈔（札遣即ち藩札）を、藩府の許可を得て元禄十六年（一七〇三）冬から福岡藩に於ても実行することとなり、その鈔の惣司（責任者）となつたのであつた。そこで大野惣兵衛・白石権右衛門に鈔の奉行を、大野忠右衛門に諸事指図の役が命ぜられ、鈔の流通をはかつたのである。城内に鈔を作る役所が設けられ、漉紙工・画工・彫工その他関係の役人が勤め、鈔交易の役所は城下の簀子町に置かれて、更に博多その他の郷村にはその出先機関が置かれて業務を行つたのである。⁽²⁾（福岡県史第二卷上六一頁）ところがその五年後の宝永四年になつて十月十四日に幕府から鈔発行の諸藩に対し停止命令が出されたのである。⁽³⁾（福岡県史第二卷上六四頁）恐らくこれは各藩における札遣の実状が思わしくなかつたためであらう。この同じ宝永四年十月に鎌田八左衛門が処分を受けているのも、その札遣の行政失敗の責任を負わされたものであると考えられる。

この年既に札所の札遣の行政が行詰りになつていた状況は、博多津要録（二）宝永四年九月二日の条に次の通り記録されている。⁽⁴⁾即ち

【廿九】宝永四丁亥歲九月二日

去年以來、札所交易差間、四民及困窮申段、被聞召付甚御苦勞ニ被思召候、御國中甘候様有之度被思召上ニ付、上方銀主中へ御無心被仰達儀ニ候、依之、清左衛門^(重時)江札所之儀諸事承届候て致指図候様ニ被仰付候、今度札所相改られ候通、銀主共へ為申聞候、西友古、永田屋次郎右衛門、大文字屋五兵衛札所ニ相改候趣、目錄ヲ以役人共^(主)の申談候處、三人之者共御仕組之趣奉得其意候、銀先之者^(主)へ申聞納得仕らせ、追々銀子指下シ可申由ニ付、三人之者共早々被差戻シ事

一正金銀之取遣、堅ク御停止被成札所御仕組之儀者、重キ御仕置候間、向後輕キ儀たり共、事々得御内意候様ニと被仰付候、札所指間候てハ為公私不宜段ハ了簡之前ニ候、此節折合、御仕組不滯様ニと被思召事ニ候、御仕組之趣、別紙書付有之候事

一札所預り銀之儀、別て不宜儀ニ被思召上候得共、空札大分出居申、正金銀之借立餘計不相調、當分札所借銀ニ仕近年之内、追々引替へ候様ニと被仰付候、今程諸色高直にて四民及困窮候段被聞召候、依之、當九月朔日より、諸運上、先、御用捨被成候、運上之儀者何方得も有之儀ニ候得共、爲御心附、當分右之通ニ被仰付候事ニ候、先々者運上被召上候て可有之更

但シ、酒運上之儀ハ唯今迄之通ニ候事

以上

亥ノ九月二日

とあつて、鎌田昌成が処分を受ける前の月の九月二日には、札所交易は破綻してしまっており、これを廃止する為の切開手術が、早くも鎌田昌成に代つて政權を握つた隅田清左衛門重時によって行われており、新しい御仕組が立てられ、銀札発行の基本金を出銀していた上方商人三人もこれを納得した模様である。これまでに札所が発行した札が、

大分空札（空手形）になっているが、これは当分札所借銀と言う事にして、出来るだけ近い年のうちに追々と正金銀と引替える措置を取ることになっている。

重時はこの昌成のあとを受けて当役となつたのであつた。後述の隅田重時の執政批判の物語書「黒田家難題記」では(5)（中村浩理著「肥筑豊州志」二〇〇頁）隅田重時は

思はずも綱政の寵臣となり、幸臣の第二に経上り、禄を喰事爰に六千七百廿余石なり、鎌田昌生を虐亡せしより既に国権を我儘に把り政務掌に治めぬ

といつており、鎌田昌成の失脚は隅田重時の策略による様にのべているが、その真偽の程は不明である。

鎌田昌生が処罰された事件について「長野日記」（福岡県立図書館蔵）宝永四年十月廿六日の条には次の様に記録されている。(6)

一、十月廿六日 終夜大風
雨する 夜鎌田八左衛門父子落着被仰出八左衛門并二男銘々知行所へ連参家僕等相添候事尤八左衛

門仕来之家頼十貳人九郎兵衛方へ六人御免被成付添参候由為糧米三百俵宛被下候由且又鎌田金左エ門水野貞左エ門天野与左エ門杯無別条候間無遠慮可相勤旨郡正大夫宅ニ而被仰渡由也

但八左エ門家財先道具計被召上其外ハ不残被下候由、一家中より翌日運取候由なり、大勢之家頼離散難儀之躰之由、八左エ門方ハ七左エ門知行所宗像郡野坂村ニ籠居、九郎兵衛方ハ四兵衛知行所障子岳へ被遣両所へ御目

付一人充相詰 但十日充
勤番也

一、十月廿九日夜大組鎌田八兵衛御暇遣候意趣ハ今度之成行ニ付八兵衛身前之覚悟も不宜候由依之御暇被下候由風説なり

一、同夜札所下役人万代八郎右エ門長谷川弥左エ門山本源助闕所被仰付、御城代組之面々也
と記されていて、鎌田昌生一族及札所（鈔発行の役所）の下役人などが真先に処罰されている。この他の役人もこの

事件に関連して処分された記録が出て来るが、省略する。

かくして吉田治年の前任者たる隅田重時が藩主綱政の時に藩財政の赤字建直しの対策の期待を背負わされて藩政に取組むこととなった。彼は大野忠左衛門・湯浅七太夫など執権の補佐を受け、金融政策をとることとなり、城下の町人吉田屋吉左衛門・大田屋五郎右衛門の二人の助力を受けて福岡に催合所と言う役所を新設した。この役所は金融の操作によって利潤をあげるのが目的であつたため、藩の金を利用して買占めをしたり、米相場の変動による操作を行ったためにはじめから多くの危険をはらんでいたのである。(7) (物語藩史3福岡藩三三四頁) そして執権前田吉左衛門・御財利裁判役三宅与次右衛門が支配する銀米は催合所銀米と呼ばれて藩内で特別な取扱いを受けていた。即ち吉田家傳録十七正徳二年の条に(8)

一九月十三日諸士除ケ米ノ内五厘返シ賜ヒ並ニ催合所借銀納方甘候様ニ役人中へ仰付ラル、旨中老番頭諸役人へ御館ニ於テ仰渡サル 先シ御代以来上ケ米を除ケ米ト言ヒ前田吉左衛門(執権)三宅与次右衛門裁判ノ銀米ヲ催合所銀米ト言フ

と書載せられているのによつて知られる。

然しこの商人を介入させた危険な対策は、遂に藩財政をますます不健全なものとし、この政策は失敗に帰し、正徳三年(一七一三)三月十三日には隅田重時は当役及び郡方本ペを被免されるのである。即ち吉田家傳録正徳三年三月十三日の条には次の様に記載されている。(9)

一三月十三日黒田主膳重時(隅田)家 山口孫右衛門 権執 前田吉右衛門 権執 尾上角右衛門 権執 柳瀬与兵衛 郡奉行 田尻彦右衛門 郡奉行 嶋村九大夫 郡奉行 各役除ケラル

とあり、三月二十三日には吉田式部治年は当役の後任を命ぜられるのである。その時の記録には同書に(10)
一三月二十三日吉田式部治年 家 月成茂左衛門重徳 中老 杉山文大夫 御用 聞 へ役儀仰付ラル御用帳写

三月二十二日 吉田式部

御当用本ノ役被 仰付候事

私ニ言御勝手方ノ御用を御当用ト言ヒ御財用裁判を掌ルヲ本ノト言フ

月成茂左衛門

御郡方本ノ役被仰付候事

右於御前黒田美作被申渡之

杉山文大夫

前田吉左衛門跡執権役被仰付候惣本ノ吉田式部江被仰付候諸事相窺可相勤候尤同役山口孫右衛門尾上角右衛門
申談御勝手向萬端宜様入念可相勤旨 御意候事

右於御前黒田靱負申渡之

と書かれていて、これによつて治年と共に藩政に参加する幹部が決められたのである。この記載によつてわかることは家老の中の一人が専任の藩政の最高責任者として御当用本ノ役を勤め、中老の一人が御郡方元ノ役をつとめ、又御用聞は執権（家老格カ）がつとめるのであり、執権はこの頃には三人が任命されるのが普通であつたと言ふことである。

然しこの隅田重時被免の時、折から藩主宣政は家督相続後初めての在国最中であり、重時失脚のあとにもかかわらず他の家老に対すると同様に、四月六日には藩主は隅田主膳重時の宅に出かけ、重時及びその子に時服其他を与え、藩主はその一族からもてなしや贈り物を受けているのである。長野日記（福岡県立図書館蔵）の正徳三年三月の条には

一殿様御継目御下被成候而初而之事ニ付、如旧例家老中宅へ被為成

三月十一日 黒田美作 (金十枚之刀拜領
百貫之刀差上)

四月 六日 黒田主膳 (重時)
(百貫之刀被下
三十五枚之刀差上)

同 十一日 齊藤丹下 右同

同 十九日 黒田靱負 右同 外ニ酒肴被下
献上品々御菓子上ル

同 廿二日 郡平馬 右同

同 廿八日 吉田式部 (治生) 右同

五月 二日 野村太郎兵衛 右同

九月 二日 大音六左エ門 右同

とその藩主宣政の家老宅訪問の日程が記されている。宣政が重時宅を訪問した時の様子は吉田家傳録十七の正徳三年四月六日の条に出ているが、ここでは省略する。このように藩主が隅田重時の屋敷を訪問している位であるのでこの段階ではまだこの被免の処置も行政担当の地位から遠ざけられたに過ぎなかったと考えられる。

ところが同年(正徳三)六月廿五日になると、隅田重時以下被免の前藩政担当者に対して次の様な大量の処分が行われる。⁽¹⁾(吉田家傳録十七、正徳三年六月二十五日の条)略記すると

氏名	被免前の役	処分
----	-------	----

黒田主膳 <small>(隅田重時)</small>	御財用、郡方惣司	隠居(元の六千六百石召上)
----------------------------	----------	---------------

黒田清次郎(惇) <small>(隅田)</small>		二千石で中老
------------------------------	--	--------

湯浅七太夫	先代は御側御用人	当代は納戸頭
-------	----------	--------

山口孫右衛門	執権	七百五拾石召上三百石で馬廻
--------	----	---------------

尾上角右衛門	執権	二百五拾石召上 八百石
		七百石召上 三百石で馬廻

前田吉右衛門

執権

八百石召上 三百石で馬廻

櫛橋角右衛門

勘定奉行

五拾石召上 二百石で馬廻

倉八平藏

御勝手方手伝

五拾石召上 一百石で馬廻

山部久左エ門

〃

五拾石召上 一百石で馬廻

三宅与次右衛門

御財制裁判役

百五拾石召上 六人扶持貳拾石御城代組

この他十三人処分されその中には前大坂御藏本奉行、御納戸組御衣服裁判役、遠賀郡芦屋代官、遠賀郡若松代官、表柏屋郡箱崎代官、居代官等が含まれている。

この処断の罪状申渡の文言は次の通りである。今この筆頭者の黒田主膳（隅田重時）に対するものを取りあげてみると⁽¹²⁾（中村浩理著「肥筑豊州志」二二頁）

連々致方不宜ノ趣被聞召候ニ付先達而御当用在方共ニ被差免候得共段々被聞召上候処弥致方不宜候故其儘ニハ難被差置此節隠居被仰付候尤被仰付候次第モ可有之候へ共先御代ニ被対右之通被仰付倅清次郎ニ新知二千石被下候而中老ニ被仰付候事

と書かれており、罪状に掲げられた理由としては非常に簡単でただ「勤方不宜」とあるだけである。他の処罰者に対する理由も同様に「勤方不宜」とあるだけであって、これだけではどの様な事柄が失脚の原因になったかわからない。しかしこの隅田重時が失脚した一件については、当時その事情を物語った書物が数多く作成されたが、福岡藩ではこれらの書物を国禁とした。それにもかかわらず、世間では写し継がれて十種にもわたる物語として現在残存している。そのうちの代表的なものが、昭和四十六年六月に中村浩理氏によって出版された「肥筑豊州志」の中に「黒田家難題記」及び「音呼物語并落書評判」⁽¹³⁾として収録されている。

前者は貝原益軒から破門された弟子柴田風山が創作風に書いて、隅田重時以下藩政の地位にあるものを弾劾したも

のである。この「黒田家難題記」の創作の中で登場する年代は、正徳元年七月の隅田重時当役在職中の時点を中心としている。後者「音呼物語」の方は作者不明であるがこの重時失脚事件から程遠くない頃に書かれたと考えられている。江戸中期に解禁された珍鳥インコに隅田重時以下の藩政の要人の悪行を物語らせている。この「音呼物語」が創作時点としてとらえている年代は、隅田・前田・尾上・柳瀬・三宅などの人々が隠居させられた時、即ち正徳三年六月を規準として物語を構成している。何れも創作風であるが、登場人物はすべて実在であり、書かれている数字や事件の内容も事実に近いものである。かなり事実であった可能性の強いものではないだろうかと考えられる。

然しここに隅田重時の失政を批判した最も確実な史料として貝原益軒が隅田重時に対して与えた諫言書を挙げることが出来る。⁽¹⁵⁾（有朋堂文庫「益軒十訓」下五三二頁）益軒は藩士の身分で藩主・家臣に儒学を講じ、そのかたわら黒田家譜・筑前統風土記を、編纂した。貝原益軒は、これまでも延宝八年（一六八〇）「黒田重種へ送る書」を書いて藩財政建直しのため藩札発行の利を説いたのをはじめとしてしばしば、その時々の彼の門人格の家老達へ宛て、訓戒書を書いている。⁽¹⁴⁾（岩波書店日本思想大系34 貝原益軒・室鳩巢「貝原益軒の生涯とその科学的業績」「益軒書簡」の解題にかえて―井上 忠 四九八頁）しかしこの黒田重時^(隅田)に対する訓戒書は、益軒の晩年八十才頃で（益軒の死は正徳四年（一七一四）八十五才）その内容からこれが作成されたのは藩主綱政の嫡子大隅守吉之がまだ在世中、しかも病氣中のことであるので、吉之が死去する宝永七年三月以前と考えられる。既に重時が被免（正徳三年）される四年前にこの諫言書によって批判される様な失政の様相を呈していたと考えなければならぬ。そこでこの六十ヶ条にわたる諫言書の要点だけかいつまんでのべながら重時の失政を把握したい。具体的な内容は、幾分真実性を帯びた前記創作「黒田家難題記」・「音呼物語」・「落書評判」の記載によって補足するが、この部分はあくまで正確な事実とは考えられないことを念頭においておかねばならない。

益軒は先づ隅田重時が自分の出自を自覚して執政を行うよう諫言している。即ち、「諫言書」の第三十八項におい

て「貴殿は父祖以来高禄を貰っている人ではなく一代で大禄を拝領したので仲間を飛越えて出世しておりずばぬけた忠義がなくてはならないと人々が言っている」ので、其覚悟が必要である」と言っている。

それでは重時の出自が具体的にどのようなものであったか。「落書評判」をみると次の様に書かれている。「清左衛門（重時）軽き者の子で生田十介と言う歩行衆の養子となる。父十介隠居して伊勢守（支藩東蓮寺藩主 長清）の御歩行となる。初めて江戸へ行った時駄荷疋正に小者老人をつけ、中間三人を召連れ、破れ股引であった。これが藩主光之の時に取立てられた。「音呼物語」では「落書評判」と似た内容のことを述べているが、はじめて福岡藩に取立てられた時の石高四百石であったとのべている。「黒田家難題記」によると、「黒田伊勢守長清の従者十三石三人扶持から綱政の時その寵臣となり宰臣の第二位にのし上り六千七百廿石となって鎌田昌成を虐亡した」とのべられている。

次に重時の素行について益軒は「諫言書」の第三四項に「御家中からは上げ米を取り、百姓からは五歩の免をとり、町人からは諸運上を取上げているので万民は憂い苦しんでいる。このため職分（家老職）にあたる者は朝夕「御勝手」に出て諸人が苦しまぬ様朝暮工夫すべきであるのに、上方から相撲・歌舞伎を呼寄せて見物していると言う話である。このため下々まで財と隙を費している。万民困窮の時節に不相応である。」又第二七項に「芝居見物の様な慰物は、只今困窮の時節には不相応で、他国よりもあざけりを受けている由である。」と言う二項目を掲げて忠告している。（この時代に福岡藩で能・歌舞伎・相撲の見物が盛んに行われたことは福岡県立図書館所蔵の「長野日記」の中にも度々出て来る。）これが「黒田家難題記」に於ては、その中で素行に関しては、「重時の一族十四人の禄を厚くし、藩主綱政の寵愛を受けるやこれまでの妻を君命といつわり離別河村氏の娘と婚姻す（第一項）。坪屋と言う酒屋の主人を纔の借米を理由に殺しその美貌の妻を妾としている（第二項）。又軽卒の者たちの娘三人を妻の様に召使い（第三項）難波の花街の茨木屋の遊女葛城を八百両で請出す（宝永五年）又藩主綱政にすすめて浜の屋敷を建ててここに

浪速の花街を移して執権前田吉左衛門・側用人湯浅七太夫・藩医鶴原雁林らと共に遊ぶ。葛城を悦と改め遊女の前歴をかくそうとした（宝永七年）（第四項）。「藩主の嫡子吉之死去（宝永七年）の翌年、江戸からその遺髪と共に送られて来た赭白の馬が崇福寺（藩主綱政が葬られた）に入ったのを乞取って自分のものとした」（第五項）重時の子清次郎を十五才まで婚約させず、綱政が江戸から呼びよせた妾が女子を生めばこれと婚姻させ、この女子が男子を生んだらこれを藩主の世継としよう」と企むも、妾の懐胎の噂沙汰やみとなる（第十一項）。正徳元年藩主綱政の帰国前に遊興のための新邸をたてここに怪松奇岩を集め侍女数十人を集め、これに綱政を迎えて姪衆にふけらせ自己の権勢を張ろうとした。綱政病氣中もその新邸の作事をやめなかった。板垣養通と言う重時の親類の医者と呼ばれ綱政の病氣を見させ、病氣を治したといつわりこれに二百石の新知行を与えようとした（第十二項）。綱政はこの正徳元年六月十八日に死去するがその病弱につけこみ六月十四日に自分に一万石の加増を受けようとする企みの布石として、先づ諸士四十人に知行を与えるよう計画した（第十三項）。と言うことが書かれている、これらには脚色も相当に含まれていると考えられるが、「音呼物語」にも浜の屋敷と言う執権共の茶屋をたて美女を集めて遊興をしたこと。綱政の末子竹松を城外の屋敷に移し竹松の死後これを申請して公儀役人を使ってこれを休所として営み遊女を上方から呼下したこと。綱政病氣中の時、首席家老の黒田美作はじめ諸家老たちは心配して詰めており、諸人たちより先に帰ることなく、又夜九ツ過ぎなければ退出しなかったのに、重時は綱政が重態で詰切にすべき時でも、誰よりも遅く来て誰よりも早く帰った。死去の前日まで遊女の屋敷の作事を昼夜兼行で行ったりしていること。又息子清次郎を北の丸の養子にして、黒田の姓をつがせ何かおもしろきことを企んでいた（藩主の世継とすることか）ことなどがのべられている。「落書評判」にも生田十介娘を離別したこと、坪屋を殺して女房を奪ったこと、一族に大禄を貰うよう取斗らったこと。などが書かれていていづれも重時の行状について共通した悪事が数えあげられている。

この竹松のことについては、「長野日記」（福岡県立図書館蔵県史資料三八八）の宝永三年九月朔日の条に次の通

り記録されている。⁽¹⁶⁾

一、九月朔日北の丸江御平産有若子様御誕生御母儀ハ唐人町ろうそく屋利兵衛娘也幼少久姫様へ被召仕去年江戸
を御下り若子様御名沢田豊之丞様 北の丸ハ
おミねとの 豊之丞様御病者ニ被成御座候ニ付当冬ニ至御病氣持ち之爲清左エ門 (重時)
屋敷江輕キ御普請被成御移徙被遊竹松様と御名被為改

とあるのと符合する。又この文中の北の丸については同じ「長野日記」の宝永六年九月五日の条に⁽¹⁷⁾

一、同五日おつれ殿江戸より下着右ハ御新造様江被召仕候女中也御北丸江被召出皆田藤助清水平兵衛同道ニ而下ル直

ニ北ノ丸江落着 只今迄北ノ丸江被召仕候お峯との野村勘左エ門倅次郎
右エ門へ縁組被仰付毛利長兵衛養子ニ被仰付同人屋敷を遣々

とあり北の丸女中おみねは野村家へ縁付きあとに江戸からおつれが入った。さきの「黒田家難題記」が第十一項にか
ける「江戸から呼よせた妾」と言うのはこのおつれのことであろう、又「音呼物語」の言う「息子清次郎を北の丸
の養子に」と言う北の丸もおつれのことを指していると考えられる。

次に益軒は「諫言書」に於て失政に対する忠告を行っている。この諫言書が出されたのは先にも述べたように宝永
六・七年頃と考えられるが、この当時上ゲ米三分一の制が家中の諸士に対して行われていた、そこで先づこの上ゲ
米の制・五歩免（五割の年貢率）の制についての批判を拾ってみると次の様な諸点をかかっている。第一項において、
「この頃の風潮は風俗華美となっていて三分一の上ゲ米を出す場合に禄高の少い小身者は別として大身者は三百石の
者は二百石としての振廻（やりくり）をすれば借金をせずやってゆけるのに、平気で借金をする。最近は料理も京都に
ならない又それ以上に結構な料理をつくる。酒も京都には先年まで花橘・蘭菊など名酒二、三種しかなかった、ところ
が近年は当地の名酒何十種とある、これは偏に響応に華美を尽すからである、世間全体がぜいたくになっているので、
困窮の諸士の中で一人が単独で儉約しようとしても実行不可能である。それ故御条目を立て（法令を出して）儉約を

きびしく申付背く者はどしどし取締らねばならない」と言っており、第六項においては「僅かな身上の者からも、大身の者と同じ様に三分一上ゲ米をとっている。そのため彼等はこの残りで父母妻子を養うことがむづかしくなっている、他国では上ゲ米に段階をつけて下程軽くしている、例えば秋月（福岡支藩）小倉などである。だから当藩でも末の身分の者、御小人・水主等二千人の上ゲ米は今の率の半分を返上してはどうか、そうしてもその分を総計すると漸く大身衆の一人の上ゲ米に相当するにすぎない。そうすれば半分免除の特典が大勢にかかり御慈悲が多くに及び、藩の損失は少くてすむだろう」と言う意味のことをのべている。

又第十五項では「上ゲ米は身上六百石以上の者にとっては痛みにならない、何故なら千石の者は馬二疋を一疋にへらし、七百石の振廻しで下人をへらし表向は儉約しているように見えるが、内證の生活のおごりは変らない」と言っている、更に第四十一項では「御家中大分の拝領を御捨（拝借金返済赦免）上方商人から借りた銀子を家臣に貸し与えたが、この上方からの借銀を借捨てにしたので家臣への貸金も棒引にしたと考えられる）になったから、上ゲ米を割当ててもそう痛手にならないと言う人もいるがこれは役人がお上の氣に入るとりつくろつた言葉であり真実でない」と言っている。このように益軒は上ゲ米制の不当を勧告し、若し強行する場合は、大身・小身との間に段階を設けるべきことを主張している。

又五歩免についても益軒の諫言書には、第四十一項において「百姓も作徳によって生活しているので五歩免をとつても痛みにならないと言うが、そんな筈はない少しでも下々の財を奪い取つてはいけない筈である。藩が御勝手不如意ならばますます道理ある御仕置（政策）をもつて経営が出来るようにするのが本法である。この本法を行わなければ当分の利益は得ても必ず災がある。難儀が目前に迫ること言うまでもない。」とその不当をうたえている。

然し「黒田家難題記」にかかげた重時の失政で、上ゲ米・五歩免について次の様に非難している。先づこの五歩免については第七項で「この十三ヶ年前に田宮甚太夫郡司の時郡中に五歩の上ゲ免を工み出す。その当時諸役人が多数

村に入込むことを禁じ郡代と免奉行の仕事の一つに統一してしまった。しかし事實はこれに反してますます郡内に役人が入込むことになり賄賂の費が日比の倍に増加した。重時はこれに対し適切な処置をとらなかった。」と言ひ、第十項の中では、上ゲ米・五歩免について次の様に非難している。「藩主綱政の京・大坂での借用銀八千貫だといつて、秋初から上米を大船に積んで運送しているが、綱政の借銀は實際は二、三千貫目にも足りない。上ゲ米の大半は重時・尾上角右衛門・前田五郎右エ門の個人の米である。これらの米を上方銀と称して上方の蔵元奉行に密かに運送して尾上の弟西友古（西友古は先にかかげた博多津要録宝永四年九月二日の条の資料中の上方三商人の一人）に計らわせて高利を食った。福岡藩の知行を貰っている者が五百九十人その石高は二十九万六千石あり、切米を貰っているもの五千貳百余人でこの米が十八万俵ある。この知行に対し藩に収納する率平均三ツ七歩（三・七割）として、その除ケ米（上ゲ米）（上ゲ米制は綱政襲封の翌年元禄二年より実施。途中元禄七年より三年間中止されていた。）は二十三年間に凡そ米で三百七十万俵、五歩の上ゲ免（年貢率）が十三年間百十万俵でこの上ゲ米と上ゲ免の二口合せて四百八十万俵の勘定になるがこの巨額の米を自由に操作して利益を食った」とのべている。

この難題記の中で重時が京、大坂での借用銀この頃（正徳元年）の借銀八千貫だと言っていると書かれているが、それより二、三年前に書かれた益軒の諫言書第二項が「御代（綱政の代）中比より京銀年々御借被成候に付御家中奢出来候て其後逐年諸人弥困窮仕候、年々御借置被成候京銀都合五千貫目不残御捨被成候て……」と京銀五千貫を借捨にしたことは藩の爲にならないよくないことだと非難していることから見ても、この京大坂の借用銀八千貫と言うのも、それ程現実とかけ離れた数字であつたとは思えない。

次に重時は城下の町人吉田屋吉左衛門・太田屋五郎右衛門の二人の協力によつて福岡に催合所と言う役所を新しく設け、藩の米金を利用して買占めや米相場の操作を行つて利益を得ようとしたことは先にのべたが⁽¹⁸⁾（物語藩史第八卷三三四頁）、この催合所について「黒田家難題記」では次のように非難している。重時は「催合所を構え三宅与次右

衛門十七石四人扶持を納戸組に取立て、己が金銀の利を食ふ。幕府の借金の利率一・五割をこえた二・一割の利足をとって家中をせたけとる。諸々の金銀取扱う役所を一つに集めて催合所とした。その役人花房・樋口・大靄・梶尾は借りにくる家中の諸士を塵芥よりいやく扱う、借りるには役人に苞を送り盛饌をささげねば借りられず、米一俵拾七匁を廿匁の相場で借金させる。返却の時拾八匁のを拾七匁五分にしか計算してくれない。しかも先取利足で銀九百目借りるのに壺貫目の借状を出させる。利ざやは皆役人のものとした。」とある。

このことによつて催合所が家中の諸士に高利をもつて融資を行つたことがわかり、その間役人が賄賂をとつたと考えられる。

この催合所の金銀をかき集めるためには家中の藩士からも配当金付で金銀を預ることもした。「音呼物語」では「前田五郎右エ門と言う大盗人御納戸催合と申事を仕出、諸人の金銀を預り、能程集時節を見合、役所を崩し、金銀を奪ひ取、隅田に遣公儀の首尾をつくろひ跡は己が私欲に致。」とのべており益軒はこれにつき諫言書第五四項の中で次の様に批判している。「五十石百石取の小身の者は子供数人ありその中には女二、三人いる。この女子を片付けるには殊の外物入りである。いかに小身でも其『まねかた』（人並のまね）をせねばならない。そのためその人は僅かな禄の飯米をへらし万の遣い用ひを差置艱難をこらえ、蟻が塔をつくるように少しづつ貯え、扱其銀を催合に入れ置いて、年々利付能頃になつていよいよ女子嫁入の時に役立てようとする」と御家中一同に『催合を召上げられた』（預け入れ金銀引出禁止の措置と考えられる）ために『手と身との様成り』（自由に分離することが出来ない意か）女子を縁付ける手立てもなくなつてしまつた。この様な人々の恨みは皆上に帰するのでこれは御冥加の為よくないことである。凡そこの様な末々数万人の憂苦しみを、各様家老方は能く聞かなくてはいけない」とのべている。

重時の執政の最大の命取はこの催合所の設置によつて金融業を強行したところにあるのではないかと考えられる。益軒もこの諫言書で第十九項に「今の政は上の利を考え臣民の憂を心配しない」又第二十項に「萬の大小事利得のゆ

く様におのみ考え萬民の苦しみを構わず、又國中、他國の外聞を考えない。」と言ひ、又第二十一項に「たとい小身の士といえども禄をとる者士として禄を受けながら商売をし、利をとり商人と利を争うはひけふなり」と批判している。

又、この他重時の政治に対する具体的な批判としては、第四十三項に「上座・下座・夜須三郡から毎年豆・あひ・

(粟カ)

ひえ・紙・煙草・芋其他を持来つて博多に宿し、歸りに塩を買つて歸つていた。ところが去年塩に運上を取立てたので塩高値となつた。このため筑後・肥前他國へその諸品を持出して、安い塩を買うようになった。ところが他國の塩買入を御法度とした。必需品をこの様にすることは罪人をつくるものであり間違ひである。」と言ひ、又第三十五項では「塩、薪等の占買・占売運上の事は、公儀の利得となるか又は町人等一兩人だけが利得を得ること故、國中万民迷惑であり、秋月、直方(福岡両支藩)近國まで難儀している」とのべており更に五十二項では、「御算用所・山奉行の証契(役所と民間との契約書類を意味するか)を反古にし、役人御公儀のため御借用誓詞(商人から借りた借金証文のことか)も破り捨てたとの事、何事もいつわり多い御家の様に思える」とのべていることなどが挙げられ、この様な政治が實際に行われたと考えられる。

この他、益軒が諫言書で儒教的思想にもとづいて忠告した重時の政治姿勢への批判としては、次のことが数えられる。

法令を出す場合の態度として「法度・仕置を出すには、先づ諸人打寄つて議論し、能々思案工夫し、民の費にならなかつた決り、いつまで行つても害なき事ならば、下知を出すべきである。もし後日に國の費・民の害になるなら、其職にある人の恥であり、又國民は皆上をあなどりその仕置は実行されず、他國はこれを誹り悪名が高くなるだろう」(第三十二項)と言つており又、「法令を出すにはよくよく詮議して、しかも下々に尋ねて実行に適するか見極めた上に出すべきである。ところが目先の藩の利益を考えたり、係の役人がひいきのために下々の迷惑をも顧みず家老に都合がよい点ばかりを言うので、各々様(家老たち)は下々にも尋ねずに、その法令を出すことがよい事だとばかり思

って発令している。」（第四十七項）とその法令を出す姿勢が誤っていることをのべている。

又家老達の下についている役人に良い家臣がないことを批難して「各様方（家老達）は殿様の御心を受け、邪惡の心は毛頭ないと、自分（益軒）も諸人（心ある人）も思っている。しかし、卒直に言うが下々の人達は決してそう思っていない。他国側の批判も宜しくない、大いに誹謗している。各様の下にいる役人が仁義の理をすて、利欲ばかり考えたやり方をするので『君上の御心』は下々には決して行われぬ」（第二十九項）と言ひ「主人慈悲深く、宰臣家老善人でも末々の役人心得違の者がいれば万民迷惑し、下の恨は上に帰す。昔から君の爲と言つて民より物をしほり取つて忠節を上げむ人を聚斂^しの臣と言ふ。これよりもまだ盗臣の方がましである。盗臣は官物を取るものであつて下に迷惑をかけぬ」（第四十二項）と言ふことをのべて家老達の下にいる役人に惡臣のいることをのべたてており、「殿様は御慈悲のある殿様なのに下の難儀が殿様に通じていない国の御仕置（政治対策）が悪いと言ふことを報告すると不快に思ふので、諸役人はじめ末々の者は下の難儀を報告しない」（第四十五項）と言つてゐる。

そして藩内の家老の權威の失墜について「長政公の藩祖の時代には藩主の御直判によつて万事決裁されていた。忠之公の時代には何事も御老中の御裁判により埒明申候、今時は各様（家老）が合點しても下の役人の同心がないと埒明申さず、上の御威勢軽くなり何事も役人衆次第で諸人の心に合わぬことばかりなり、各々様は役人衆に従ひ、上が下になり、下が上になつてさかさまの世の中だと諸人が言つてゐる」（第四十四項）と領内の人々が批判している状態をのべ、更に藩外からの福岡藩の行政に対する評判をとりあげ「近年国中の御仕置非道であると国の中は勿論、肥前・筑後・五島・平戸其外に於ても専ら評判している。自分（益軒）の様な世間にうとい者は知らないのに、他国の者が却つて委しく知つており、他国の者は誰に氣がねすることもないので遠慮なくうわさをする。藩内の甘木・上座・下座・怡土・嘉摩・遠賀など天領に接する地域は絶えず人の往来あり国内よりも他国の方へよりよく事情が知れてゐる。これは各様は知らぬだろうが、このことは決して虚言ではないことを申かけて誓ふ」（第四十六項）と福岡藩の

行政に対する他国よりの批判の非常にきびしい事を忠告している。そして諫言書の終りの方で「暴斂凶惡ならば、その時は民の利を奪い、財を得ても、人恨み天怒つて禍起る。仁厚にして民を愛すれば、上には利益なくとも民悦び、天の恵あつて、災なく、年豊かである」(第五十八項)と言い又、「唐にても君も臣も我儘で人の諫を聞かぬ人は必ず亡んでいる。家の亡ぶ様な行爲を楽しみ、ひたすらその様な行爲に打込んだり、好んだりすれば必ずその人亡ぶ、人が亡さねば天道が亡ぶす」(第五十九項)とのべて重時の政治姿勢に対する反省を促しているのである。

以上益軒の諫言書、其他の批判書によつて隅田重時の行つた政治が失政であつたこと及びその大項を知ることが出来るのである。

この様な世間の批判をあびる隅田重時の失政の時代に、家老職の一人として職を奉じていた吉田治年も、その失政の末期には、改革派の諸士と共に、日夜重時排除の運動に暗躍していたものと考えられ、其身に危険を感じ、死を覚悟していたのである。即ち吉田治年が正徳二年(一七一二)四月二十一日に書いた次のような遺言書が残存している。この中で治年は自分の死後とるべき処置をこまごまと指示している。(9)(吉田家文書四六七号)この遺言書はその子又助及びその兄弟に与えたものであるがこれによつてはからずも吉田治年の抱いていた家老職の身分の者の政治姿勢が如何にあるべきかの理想の一端をうかがうことが出来る。

遺書

一 吾が没後又助家督被仰付之、禄減候共、聊不足心佐しはさミ被申間敷候君たらずといへとも臣たらずんハ有べからざる歟、本文失念有間敷候、幸ニ中老の列ニ被加置候ハ、内ニ忠義を積而時ヲ待へし、若又家老職之命候ハ、猶以敬を加へ自ラ徳義を篤く累歳四五十に及而君を佐ケ民ヲ養ふ思之通有へく候、萬一御家之大変ニ依而罪を得るといふとも悔ル事なかれ、存亡ヲ主トともニするの義ヲ樂へし、自然罪ヲのがれて流浪の身と成候ハ、便有村里ニ閑居ヲ求へし、言ニ不及二君ニつかゑざるの義ヲ守り、土民となりて時節ヲ待給ふへき事

一陽受院様御安座の心遣怠有間敷候、各母孝養之儀ハ不及言候、次ニ貞松院不便ニ候、心ヲ添可被申候、其外予兄弟中江疎遠有間敷候、各兄弟中水漁の交申も愚カニ候事

一家臣ヲ恵ミ其人相應之事ヲ命して家久數人ヲそなハざる工夫肝要ニ候、惣而家法ヲ堅ク立而能守らしむる是人ヲそなハざるの本、慈愛の第一ニ候、又人ヲ撰あぐるに十人のさす所ヲ以して、私心ヲ以する事かなるべき事一用心銀（有事の爲の貯銀）近年ニ至而公務のためニ取出し候段、又助存之前ニ候、用心銀無之而ハ忠義も乍見行かた候、常ニ儉約ヲ用、何とぞ少宛ニ而茂取収置候工夫有へし候、且兵器修補ノ心遣も怠有間敷事

一各母自分の米先年留守居共ニ渡之、藏奉行江預置候儀又助存之前ニ候、母之助ケニ相成候様ニ心遣尤ニ候事

一納戸銀五貫目三芳市左衛門江預置候、此銀貳貫五百目久野駒之丞貳貫目櫛橋十左衛門江與之候、後々迄兩人ため宜敷様ニ又助才判いたし遣被申へき事

一兄弟中米銀之殘取集、先年留守居共ニ渡之藏奉行江預置候此儀も又助存之事ニ候、何とぞ心遣ヲ以少之助ケニも相成候程ニ、成候ハ、五ツニ分ケ齊藤甚右衛門妻、吉田奎之介、吉田久大夫妻、嶋井与八郎、松本弥右衛門江相渡可被申候貞松院米銀ハ兼而又助存之通前々より三芳又右衛門同市左衛門江預置候、弥以無滯様ニ才判いたし遣可被申事

一愚筆ヲ以書ちらし置候物多々有之候各遂熟覽後の助ニ茂成へきものハ残し置或ハ増補ヲ加、改正いたし無用のものハ勿論焼捨可被申事

右之外諸事宜敷様ニ相はからひ可被申候予平生の行狀言語ヲ精しく察し、可なるへき事ハ行之、惡事ハ速かに改、可被申候常々申候ことく人の人たる道ヲ不知人ハ人ニ阿らず、人の道ヲ知ルニハ聖賢ノ書ヲ讀ニ志かず、能々学文の實理を悟り、身ヲ修、家ヲ斉、孝弟、忠信の道ヲ正しく行給ふへし、凡ソ各の善行ハ孝、不善ハ皆不孝ニ而候、深く慎給ふへし、吾か没後ヲ無心許おもひ斯言ニハ阿らず、反復丁寧ニ示而已各幼年より終ニ邪曲

之行ヲ不見、正直嚴明温和慈仁之至、吾か悦筆詞ニ盡かたく候、誠ニ各の孝行おそらくハ曾子ヲ恥へからず覚候也

正徳二年四月廿一日 治年（花押）

吉田 又助 殿

久野 駒之丞 殿

榊橋十左衛門 殿

とあつて、第一節、第三節、第八節の諸項に儒教精神を以て貫かれた吉田治年の潔癖な心構えがにじみ出ている。其他の節に於ては自分の死後の具体的な金銭上の処置を指示したものである。この様にして治年は、この遺言書を書くことによって家に対する後顧の憂をなくし、重時排除の運動に邁進したものと考えられる。実にこの正徳三年に行われた隅田重時以下執政に当たっていた諸役人の追放は福岡藩政史上に於ける一大政変であつたのである。

〔註〕

- (1) 吉田家傳錄 十五 宝永四年十月の条 (九州大学九州文化史研究所々蔵)
- (2) 福岡県史 第二卷上 六一頁
九州史料叢書 4 益軒資料 三 居家日記 三一頁
福岡県史 第二卷上 六四頁
九州史料叢書 4 益軒資料 三 居家日記 三七頁 四一頁
- (3) 九州史料叢書 10 博多津要録 二 一一九頁
中村浩理著 肥筑豊州志 二〇〇頁
長野日記 宝永四年十月廿六日の条 (福岡県立福岡図書館蔵)
- (4) 物語藩史 3 福岡藩 三三四頁
- (5) 吉田家傳錄 十七 正徳二年九月十三日の条
- (6) 同 十七 正徳三年三月十三日の条
- (7) 同 十七 正徳三年三月二十三日の条
- (8) 同 十七 正徳三年六月二十五日の条
- (9) 肥筑豊州志 二一一頁
- (10) 同 二一七頁
- (11) 岩波書店 日本思想大系 34 貝原益軒・室鳩巢 四九八頁 貝原益軒の生涯とその科学的業績 井上 忠著
- (12) 有朋堂文庫 益軒十訓 下 五三二頁 黒田重時へ送る書
- (13) 長野日記 宝永三年九月朔日の条
- (14) 同 宝永六年九月五日の条

(18) 物語藩史第8巻 三三四頁

(19) 吉田家文書 四六七号文書 吉田治年遺言書 九州大学九州文化史研究所々蔵

〔補記〕

この章の稿を成すに当って御教示を賜った桧垣元吉・井上忠の両先生、又種々の便宜と御援助を与えられた九州文化史研究所職員の方々及び長 洋一氏、それに快く資料閲覧を許された福岡県立図書館に対して心から感謝いたします。

Toshiaki, Miki

A Study of Harutoshi Yoshida, Karō of the Fukuoka Han (II)

Résumé

This study has investigated what special points Harutoshi Yoshida, the fifth head of the Yoshida family, made of in executing the administrative works of the Fukuoka Han, while he held the position of Karō from 1713 to 1721, under the control of the Rōjū of Tokugawa Bakufu. The paper will be serialized. This number contains only the first chapter "misrule of Shigetoki Kuroda, the previous appointment of Karō."